衣のNGO
ふるぎのゆくえをおいかけて
JFSA
ゆたかなくらしをささえる
せかいのまずしさをみんなでえる

NPO 法人日本ファイバーリサイクル連帯協議会
〒260-0001　千葉市中央区都町 3-14-10
Tel・Fax：043-234-1206
E-mail：jfsa@f3.dion.ne.jp
ホームページ：http://www.jfsa.jpn.org/

会報 46 号　2018 年 4 月

特集　パキスタン派遣報告

ラゼーブ・アリさんは、手刺繍の工房を経営しています。ラゼーブさん自身は12歳でこの仕事を始めました。
「この仕事は競争が激しく、工賃はとても安いです。そして私たちの仕事に未来はないです。自分たちも目が見えなくなり、手が動かなくなったらそれでおしまいです。」
（学校と仕事、暮らし　8ページより一部抜粋）

結婚式のドレスの手刺繍を見せてくれたラゼーブさん

目次

●特集●　パキスタン派遣報告
「ＪＦＳＡとＡＫＢＧが目指す新規事業」　2～3ｐ
「パキスタンに暮らす人の強さとたくましさ」　4～5ｐ
「学校と仕事、暮らし」・・・・・・・・・・6～9ｐ
「パキスタンの公立学校、私立学校」・・・10ｐ
千葉センター便り「輸入古着に期待！」・・・・11ｐ
東葛センター便り「コンテナ」・・・・・・・・・12ｐ
心根（こころね）フリマ通信
スポット会場～世田谷公園～・・・・・・・・・・13ｐ
「ＪＦＳＡ紡ぎ債」から５年経って・・・　14～15ｐ
チャエケサート・・・・・・・・・・・・・・・・15ｐ
ＪＦＳＡからのお知らせ　・・・・・・・・・・・16ｐ

派遣報告

ＪＦＳＡとＡＫＢＧが目指す新規事業

ゾーンにあるワリー氏の倉庫。ゾーンの他の倉庫から仕入れた古着が山のようにつまれている。この中に JFSA で販売されるビンテージの古着もある。

海外事業担当事務局　田辺　航太郎

新規事業への取り組み

ＪＦＳＡの古着回収量は２０１３年度までおよそ右肩上がりで増加していましたが、その年をピークに年々減少してきています。日本、パキスタンの両サイドで古着の販売収益を運営費としているため、その対策は急務となっています。今回の派遣時には、パキスタンサイドの状況確認と今後の方針について話し合ってきました。

ＪＦＳＡから輸出された古着の状況

昨年度までのＪＦＳＡからの古着輸出量は、ピーク時以降の持ち越した在庫があり、年間４回のコンテナ送り出しを行なえているため変化していません。またＡＫＢＧの古着輸入量は、２０１２年から取り組んでいるグリーンコープや２０１７年に初めて取り組んだハンサリム連合から送り出されたコンテナもあり、むしろ増加しています。しかし最近のパキスタンでの古着市場は、中国から安価な古着と新品衣料が大量に輸入されていることや、卸売市場においてはアフガニスタンへの古着輸出に関税が課されるようになった影響により低迷しており、古着卸価格の相場も低下傾向にあります。ＡＫＢＧの卸先であるワリー氏とニアーズ氏の販路は、主にパキスタン国内とアフガニスタンであったためにこうした状況から影響を受けて、２０１７年８月以降到着した古着に関しては在庫として残っている分が多くあります。

ワリー氏、ニアーズ氏の動向

そうした中でワリー氏は、新たな販路としてタイやアフリカなど範囲を広げた取り組みを始めています。ワリー氏はカラチ市に、古着を含め様々な倉庫が立ち並ぶ地域であるシェールシャーとカラチ特別輸出加工区（ＫＥＰＺ、通称ゾーン）に拠点を構えています。

シェールシャーに輸入された古着は、パキスタン国内の小売業者や仲卸業者に販売される分とアフガニスタンに輸出される分が多くを占めています。ＪＦＳＡやグリーンコープ、ハンサリム連合か

ら輸出されたコンテナはこちらに届きます。

ゾーンでは50以上の古着業者が大きな倉庫を構え、アジア、アメリカ、ヨーロッパから古着を輸入し、それらを選別して世界各地に輸出しています。アジアやアフリカだけでなくアメリカやヨーロッパへも輸出されているのは、パキスタンでは人件費や土地代が安いため、自国で選別するよりも輸送してそれらの作業を行なったほうが経費を抑えられるという理由からです。ワリー氏は受け取ったコンテナの中から女性物を中心に選び、これらをタイに輸出するために再選別しています。イスラム教徒の女性は肌の出る服装をしないため、パキスタンでは女性用の洋服の需要はあまりありません。タイでは自国だけでなく、隣接するカンボジアやミャンマーなど周辺の国でも需要があり、一年を通じて暑いため特に夏ものに関してはパキスタンと比べてかなり価格が高いです。またタイ国内で古着事業を営むパキスタン人も多く、ネットワークがあります。その状況を活かすことを考えています。

一方ニアーズ氏の状況は芳しくありません。彼はワリー氏と同じパシュトゥーン人（パキスタン、アフガニスタン国境に暮らす部族）ですが、出身がアフガニスタンであるため国籍はアフガニスタンです。そうした人たちが多くパキスタンで生活していましたが、パキスタン政府が取り締まりを強化したため、ニアーズ氏やその家族も含めてほとんどの人たちがアフガニスタンに帰国しました。古着に関しての課税も含め、政治的な事情により困難な状況にあります。ニアーズ氏は新たにアフガニスタンで拠点を構えて古着事業を行なっていますが、現地では現在友好的な関係にあるインドから安価な新品衣料が無税で輸入されており、古着市場は厳しい状況にあるとのことでした。

ＡＫＢＧとの協議

現在、ＡＫＢＧは日本や韓国から届いた古着をワリー氏、ニアーズ氏に販売する、いわゆる元卸業を行なっています。ワリー氏、ニアーズ氏はその先の小売業者や地方の小規模な卸業者に販売する、いわゆる仲卸業を行なっています。またワリー氏はゾーンで輸入業者から「ビンテージ古着」を購入し、それらをＪＦＳＡなど日本やタイの古着業者に販売する事業も行なっています。

ＡＫＢＧの新規事業は、自前の倉庫を事業拠点として設け、現在ワリー氏、ニアーズ氏が行なっている事業を行なうことでより収益を上げることを目指します。将来的には小売業を行なうことも考えています。元卸よりは仲卸、小売りと進んでいくことで販売単価は上がりますが、そのための経費も当然掛かっていきますし多くの人材が必要となります。そしてそれを進めるうえで、長くともにアル・カイールアカデミーの運営費を作ってきたワリー氏、ニアーズ氏とも協力しながら行なっていけるような形も模索します。簡単ではありませんが、ＪＦＳＡ設立当初から考えていた形でもあり、このことを見据えてＡＫＢＧ事務局のカユーム氏が長く培ってきたパキスタンでの様々な古着事業者との関係もあるため、ぜひ実現させたいと思っています。ＡＫＢＧとは、立ち上げるための経費とその後の運転経費の試算および全体のスケジュールを作成中です。今後もこちらでその進捗を報告していきます。

シェールシャーにあるワリー氏の倉庫
彼の息子たち（右・左）とワリー氏の従弟の息子（中央）
「この子たちの歳のころから父親について古着の仕事をしていた」とワリー氏

パキスタンで暮らす人の強さ、たくましさ

アル・カイールアカデミー本校で学ぶ子どもたち
1年生のクラスで英語を勉強している

広報担当事務局　桑山　奈々

スラムで暮らしていく

以前、縫製工房で働いている女性に、1ヶ月の生活費を教えてもらいました。「私と夫（私立学校に通う生徒たちの送迎ドライバー）の収入は合わせて1ヶ月に1万4千ルピーです。水道はひかれていないので、タンクローリー車が運んでくる水を買い、家の上にあるポリタンクに貯めておきます。水の代金は1回の購入が200ルピーほど、2人暮らしだと1ヶ月で約4、5回買います。持ち家ではないので、1ヶ月5千ルピーを家賃として支払います。電気代は1000ルピーですが、1日で約8時間ほど停電します。食費は1か月約3千500ルピーです。朝はチャイを飲み、夕飯は豆や野菜のカレーとチャパティ（全粒粉を薄くのばして焼いたパン。1枚20ルピー）を買って食べています。また、3千ルピーは夫の実家に仕送りをしています。もし、どちらかが病気やけがをすると医療費もかかります。今は夫婦2人の生活ですが、子どもが生まれたらその分お金がかかります。衣類や生活雑貨のお金もかかります。」と教えてくれました。そして「夫と力を合わせて暮らしています。縫製工房の仕事も大変ですが、夫のためと思えば頑張れます。」と笑顔で答えてくれました。

スラムで暮らしている人々（特に男性）の中には、日雇いでの仕事（左官職人、塗装業、大工など）をしている人も多くいます。毎日仕事を得ることができないと、また怪我や病気をしてしまうと安定した収入を得ることができません。その収入も、家族と一緒に暮らしていくには十分とは言えません。スラムで暮らしている人々は、本当に厳しい暮らしをしていると感じます。ですが、彼らから悲壮感を感じることはなく、強さやたくましさを感じます。

派遣報告

学校と仕事、暮らし

結婚式用のドレスの刺繍を行なう工房
アル・カイールアカデミーのあるスラムエリアにこのような工房がいくつもある

海外事業担当事務局　依知川　守

アル・カイールアカデミー教育事業の確認

今回の派遣では、第4分校と北方地域バラコートの青空学校を除く全てのキャンパスを訪問しました。本校では現地銀行の寄付金により、コンピュータクラス・リニューアルのための工事が行なわれていました。また同銀行の寄付金で屋上に設置されたソーラーパネルは、本校で必要な電気の半分程を賄えるものなのですが、故障してしまい修理中でした。また停電時に使っている発電機も同時に故障してしまっていました。電気については本校を含めた周辺地域では1日のうち停電が約8時間もあり、電気が無くなってしまうと教室内の天井の扇風機や縫製工房のミシンも使えなくなってしまい大変困ります。ソーラーパネルや発電機は数日以内に修理が完了するだろうとのことでした。

カディ(手織りの布)教室

ムザヒル校長は、子ども達が楽しく仕事に繋がる技術を学べること、また社会には様々な仕事があることを身近に感じられるような場として、カディの機織り技術を学べる教室を本校内に開いています。今はカディ職人のファハッド先生のもとで8年生の男子を中心に34名が学んでいます。

ファハッド先生(27歳)

ムハジール（※）で、インドとの分離独立以前から続くカディ職人の家系に生まれ、本校のあるニューカラチに隣接したオーランギタウンで育ちました。学校に通いながら12歳でカディの修行を始め、その後インダス大学で服飾生地のデザインを学んだそうです。

現在、2人の弟と本校近くにカディ工房を営んでおり、授業が終わるとそこで働いています。工房ではブティックなどで仕立てるための生地を作っています。カディの工場はあまり多くありませんが需要はあります。最近は大きな工場で機械を使って作っているところもありますが、彼らの売りは手作りであること

稼ぐ

アル・カイールアカデミー本校のナイームくんという男の子（14歳）にインタビューをしました。彼は午前は学校で勉強をし、2時から4時までマドラッサ（宗教学校）で勉強し、夕方からは鍵屋のおじさんの工場で見習いとして働いているそうです。彼に将来は何になりたいのか聞いたところ「鍵の仕事を続けたい」と答えてくれました。彼は「まずは今の仕事で技術を習得したい。そして鍵の仕事をしながら携帯電話についても勉強をしたい。将来は鍵屋の仕事は弟子にやらせて、自分は携帯電話の店を持って仕事をしたい。携帯電話の仕事もすれば、たくさんお金を稼げるだろう」と将来のプランを教えてくれました。ナイーム君は7人兄妹の上から2番目です。働いている鍵のお店や家、学校で仕事のことやお金のこと、それぞれの暮らしのことなどを見聞きしているのでしょう。終始恥ずかしそうに彼は話していましたが、仕事の話になると〝生きることを自分から獲得する〟〝仕事で稼ぐ〟という姿勢を感じました。

誠実に一生懸命に

ムザヒル校長に仕事というものについて、尋ねた時のことです。「学校は子どもたちにとって1つの社会です。子どもたちには、色々な人が混ざり合うことで社会は成り立っていることを知ってもらいたいです。例えば、裕福な人とそうでない人、知識がある人とない人、勉強できる人とできない人などです。学校には、建築作業をしている左官職人や大工が出入りしています。彼らは、学校で学んだことはないかもしれませんが仕事の経験を通して知識を得ています。職業に上下はありません。皆がその仕事を一生懸命することが良い社会を作ることにつながるのではないでしょうか。このことを実現するには、子どもたちの親の役割も大きいです。親が『一生懸命勉強しないと大工さんになっちゃうよ』と言うと子どもたちが、大工という仕事を〝下〟に見てしまいます。それはとても悲しいです。

以前、こんなことがありました。20年前に卒業した生徒が、突然学校を訪問してきました。私はその卒業生を覚えていませんでしたが、彼はクリフトン（海沿いのエリア。富裕層が暮らしている）でテーラー（※）をしていると言いました。そして『世の中にはいろいろな仕事がある。どんな仕事をするかではなく、誠実に一生懸命仕事をすることが大切』という私の言葉が心に残っていて、自分の仕事を一生懸命していると言いました。彼が訪ねてきてくれたこと、そしてテーラーを一生懸命していることがとても嬉しかったです。」

ムザヒル校長がアル・カイールアカデミーを開いて30年がたちました。スラムの中には多くの卒業生がいて、学校で得た知識や経験を活かしながら一生懸命働くことで、自分たちの暮らしを獲得しているのでしょう。そんな彼らとのやり取りから伝わる、〝生きる力〟にとても魅力を感じています。

※テーラー　スーツなど紳士服の仕立て屋。寸法取りや型紙起こしなどを行なう。

アル・カイールアカデミーキャンパス5で学ぶ男の子（奥）
彼は学校が終わった後、バイク修理の見習いとして親方（手前）と一緒に働いている
インタビューをしたナイーム君も、彼のように親方（おじさん）について仕事を覚えているのだろう

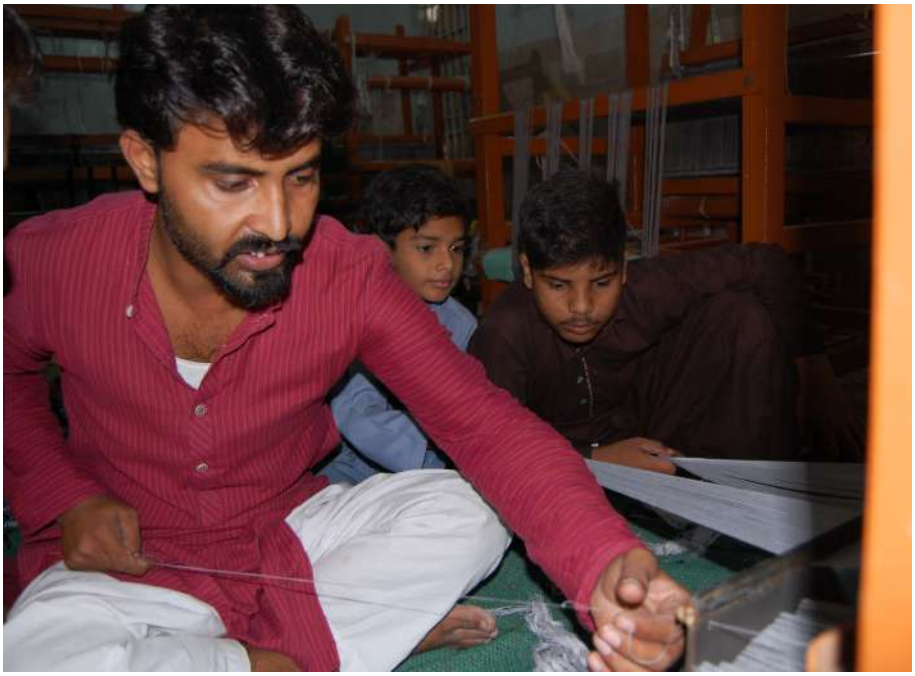
です。しかし、他のどの業界と同様に手織布の業界も価格競争があります。また織機は1台1万5千～2万ルピーで、カディ職人の給料は1ヶ月2万～2万5千ルピーなので、工房を運営し、利益を生み出していくことは大変だそうです。

アル・カイールアカデミーで教えること

「初めは糸を織機で使えるように巻き直すところから覚えます。2年くらいで、手織りの作業そのものは覚えられます。それ以降、仕事をする場合は様々なオーダーに応じることで、技術を高めていくことになります。学校では生地を織る以外に、マット用の裂き布なども作っています。教えた子どもが、もし仕事をしたいと言ってきてくれたらうれしいです。最初から全て教えて、それを受け入れてもらったことになりますから。今は少ない人数で仕事をしていますが、教えた生徒が加わって大きくなれたらうれしいです。

教室の子どもたちは「他の友達は来ていないけど、自分はこのカディが楽しくて来ています」と話していました。」

※分離独立時インドからの避難民。ムザヒル校長もこの民族。カラチ市内に多く暮らしている



アル・カイールアカデミー本校でカディを教えるファハッド先生（左）

キャンパス7で学ぶ子どもたち
美術の時間に作った花を見せてくれた

女の子たちの職業訓練課（縫製コース）
JFSAの団体会員「NPO法人地球市民交流基金アーシアン」が運営費の支援を続けている

ザヒッド・アリさんへのインタビュー

アル・カイールには7歳で入学。10年生（マトリック：大学入学検定試験）まで本校で学び、その後アル・カイールアカデミーのカレッジに進学。今はカラチ大学で学びながらアル・カイールアカデミー本校でも仕事をしている。

週に1回は兄のラゼーブ・アリさんの工房で働いている。将来は会計士になりたい。

●家族について

父親（9年前に心臓発作で亡くなる）、母親（およそ45歳）

・長男（30歳、7年生まで進学。紙の裁断工場勤務。既婚）

・次男（29歳、7年生まで進学。印刷工場勤務。既婚）

・三男　ラゼーブ・アリ（27歳、本校8年生まで進学刺繍工房を経営。既婚）

・四男（本校卒業。26歳、カラチ大学勤務）

・五男　ザヒッド（本校卒業。25歳）

・六男（本校8年生在籍、19歳）

・長女（本校8年生在籍、18歳）

長男、次男は生後まもなく祖父の家に引き取られ、育った。祖父には娘しかいなかったことなどが理由。長男、次男は祖父の暮らすカラチの市街地サダルの学校で学んだ。

アル・カイールアカデミー本校の仕事は、月曜から土曜で定時は7時40分～17時だが21時～23時まで残業することもしばしばある。（給料1ヶ月1万7千ルピーのうち1万2千ルピーを母親へ渡している）

今は全員が1つの家に暮らしている。家は持ち家で1ヶ月の食費など生活費は3万ルピー程。兄弟がそれぞれの給料の中から母親にお金を渡している。ただ三男までは妻と子どもがいるので、自分の家族と母へ渡す分と半々に分けている。

ザヒッド・アリさん

ラゼーブ・アリさんの手刺繍工房を見学

ザヒッドさんの兄、ラゼーブさんの工房は本校から歩いて5分ほどのところにあります。建物の2階の5畳ほどの広さの部屋に大きな手刺繍のための台が2つ置かれ、この日はラゼーブさん以外に2人が働いていました。

主な仕事は結婚式のドレスの刺繍で、職人たちはその時期のオーダー量に応じて集められるそうです。ラゼーブさんによると工房の売上は1ヶ月あたり4万5千ルピーだそうです。この中でラゼーブさんの家族の生活費となるのは、1万～1万5千ルピーほどです。残りが職人の給料（ラゼーブさんとほぼ同額）や家賃、材料費、水光熱費、発電機の燃料などになります。就業時間は8時～20時です。ラゼーブさん自身は12歳でこの仕事を始めました。この地域にはこのような刺繍の工房が幾つもあり、早い子は10歳から仕事を始めるそうです（初めの2、3年は完全に無給）。

この仕事に未来はない

「この仕事は競争が激しく、工賃はとても安いです。そして私たちの仕事に未来はないです。自分たちも目が見えなくなり、手が動かなくなったらそれでおしまいです。」刺繍をする手を止めることなく、ラゼーブさんは私たちに教えてくれました。

若い頃から明かりの十分ではないような部屋で昼夜続けられる仕事ですから、目や体にかかる負担がとても大きいことが想像されます。彼の話す将来への不安は現実的なものだと思います。

「それはなんの仕事ですか？」と脇にあった綺麗な刺繍の作品を尋ねると「これは妻のドレスのために作っているんです。」と嬉しそうに答えてくれました。

シェールシャーに到着したコンテナ
マズドゥーリーたちは手鉤で荷物をひっかけ、肩に担いで運んでいく

2チームが一緒になってしまったコンテナ
競うようにして荷物が降ろされていった

コンテナ荷下ろしの立会い

今回の派遣期間には、ＪＦＳＡの第59回コンテナ、そしてグリーンコープの第16回コンテナも到着が予定されており、グリーンコープから6名の方が同行されました。どちらのコンテナも、到着見込みの日程には数日の余裕をもってスケジュールを立てていたのですが、コンテナが卸業者のニアーズ氏の倉庫に到着したのは、私たちの帰国日の3月14日でした。今回も通関の荷物検査が厳しく、検査を受けるために見込んだ日程より更に遅れてしまったのです。なんとか滞在中に荷下ろしの確認ができてホッとしました。

50 kgのベールを担ぐマズドゥーリー

通常荷下ろし作業は、マズドゥーリと呼ばれる日雇いの荷役労働者が1グループ（5、6人）で行ないます。ですが、今回は何かの手違いで2グループが鉢合わせになってしまいました。結局、総勢10名以上で、物凄い勢いの作業となりました。彼らは1日に2、3コンテナの仕事がある時もあれば、全く仕事の無い時もあるそうです。マズドゥーリの1人に尋ねると、月におよそ4万5千ルピー前後稼ぎ、生活費を除いて2、3万ルピーを故郷の村へ仕送りしているそうです。

職種は異なりますが、アル・カイールアカデミーの生徒の親達も、建築現場の作業員、塗装業、運転手などの日雇い仕事がほとんどです。つまりその日仕事が無ければ、または病気で休んでしまえば無給という過酷な環境です。そしてこの荷役労働は特に体を酷使するため20年以上は続けることは難しく、他の日雇い労働よりかなり高い賃金なのだと聞きました。

派遣スケジュール、同行者

3月5日（月）～15日（木）ＪＦＳＡ事務局　依知川守
3月5日（月）～14日（水）ＪＦＳＡ事務局　桑山奈々　渡邉（ＪＦＳＡアルバイト）
3月9日（月）～15日（木）株式会社オイシックスドット大地　豊島氏、グリーンコープ連合　6名
3月9日（月）～14日（水）株式会社オイシックスドット大地　山口氏

私立学校、公立学校の訪問

アル・カイールアカデミーキャンパス５は以前公立学校だった建物をシンド州から無償で借りています。この公立学校は、今から約２０年前、廃校となりました。その理由は先生が学校に来なかったからです。「このような学校が、カラチ市のあるシンド州だけで８千校もある」とムザヒル校長は言っています。学校に先生が来ないとはどういうことなのか、またミドルクラス以上の子どもたちが通う私立学校とはどのような場所なのか、アル・カイールアカデミーの先生の協力を得て２校訪問してきました。

公立校だったキャンパス5

私立学校

月謝：３千ルピー
生徒：１０００人（男女比　５：５）
　　保育園クラス～１０年生（３歳～１５歳）
先生：１００人（男女比　３：７）

●生徒について

皆ミドルクラスの暮らしをしています。親の職業は様々です。銀行員や医者、教師、工場でのエンジニアなどの仕事をしています。（アル・カイールアカデミーと違い）途中で退学する生徒はほとんどおらず、ほぼ全員が４年制の大学まで進学をします。学校は午前中（８時半～１３時）のみです。

●先生について

先生の給料は２万５千ルピー～５万ルピーほどです。女性の先生が多い理由は、午前（１３時半まで）の仕事のため、家族（夫や両親）の理解を得やすいそうです。

ここは、平均的な私立学校だと、この学校を紹介してくれたアル・カイールアカデミー教務主任のリズワンさんが教えてくれました。市内で最も月謝の高い学校は１ヶ月２万ルピーだそうです。一方でキャンパス７のあるスラムエリアの私立学校は、月謝が５～６００ルピーだそうです。

公立学校

生徒：１０００人ほど（男女比　３：７）
　　１年生～１０年生
　　（様々な年齢の子どもが通う）
先生：６０人ほど

●生徒について

午前は女の子、午後は男の子のクラスに分けられています。スラムエリアやロークラスの暮らしをしている子どもたちが通っています。親は日雇い労働者や、工場勤務、ドライバーなどです。働きながら学んでいる子、途中で退学する子もいます。

●先生について

給料は低く遅配もあるため、先生の暮らしは厳しいです。州政府からの役人が定期的に、授業が行なわれているか確認するため学校を訪問するそうです。

私たちが訪れるため、この日も女性の役人が来ていました。そして「私は学校の運営の管理を熱心に行なっているので、この地域の公立校は機能していますが、マネジメントが行なわれていないため、廃校状態の学校も州内には多くあります。教育にかけるシンド州の予算が不十分なため、このようなことが起きていると考えています。先生や同僚といっしょに州政府に予算を上げるよう訴えてますが、実現できていません。」と教えてくれました。

私立学校　1年生クラスの子どもたち

私立学校の子どもたちは制服を着て、学校のパソコン教室や実験室、カフェスペースなど設備も十分整っていました。一方、親の職業、途中で退学する子がいるなど、厳しい暮らしをしている子どもたちが通う点で、公立学校とアル・カイールアカデミーの子どもたちは似ていると感じました。

「一生懸命子どもたちに向き合う先生が、子どもたちにとっての良い教育で、大切です。」とタスニーム副校長は言いました。ムザヒル校長も「良い先生を採用するために給料をあげたい。そのことが子どもたちのためになる。」と言っています。

ＪＦＳＡが輸出し、ＡＫＢＧが卸売りしている古着や毛布で得た利益は先生の給料も含めた学校の運営費になっています。公立学校、私立学校を見学して、改めてＪＦＳＡに届く古着や毛布の重要性を感じました。

輸入古着に期待！

上：12 月 8 日にオープンした輸入古着コーナー
左上：引っ越し屋さんが買っていったオーバーオール
左下：輸入古着コーナーオープンに合わせて看板も新たに作成

昨年、12月8日に千葉ショップの倉庫側売り場に輸入古着（パキスタンから輸入したアメリカやヨーロッパの古着）コーナーをオープンしました。私はそれまでフリマやイベントでの街商販売はやってきましたが、店舗販売については担当したことがありませんでした。街商はお客さんに出会うために人の集まる場所に出て行きますが、店舗は腰を据えてお客さんに足を運んでもらわないといけません。オープン以来、「今日はお客さん来てくれるかな、、」という思いが頭を巡っています。一人でも来店する方が増えると嬉しいですし、お客さんがお気に入りの一点を見つけて購入してくれた時には俄然元気が出ます。その方がまた来店してくれた時にはガッツポーズをしたいぐらい嬉しい気持ちになります。逆に売れない日もあり、一喜一憂の毎日です。そんな日々が私に気づかせてくれたのは、店舗で商売をすることの原点にある「喜怒哀楽」だと思います。

輸入古着がきっかけとなり、それまで話したことのなかったお客さんとも話をする機会ができました。そのお一人は引っ越し屋さんで、仕事の時に使える丈夫なアメリカ製の作業着を買っていってくれました。寒い倉庫作業を気遣って差し入れをしてくれたりして、新しい品物が出るのを楽しみにしてくれています。アメリカで使われていた作業着がパキスタンへ行って、日本に来て、今は引っ越し屋さんに使われています。長く着てもらえるといいなぁと思います。

今、若者に古着が流行していることもあり、少しずつ新しい若いお客さんも来店してくれています。輸入古着というバリエーションがもう一つの新しい間口を広げてくれたと思います。お客さんと立ち話をする中では、パキスタンのことについて話をすることもあります。世界を巡る古着のながれを話したり、仕入れ先のワリー氏の古着の山の写真を見てもらったりします。古着の回収もやっていますと話しをすると輸入古着の話をきっかけにして、「送るのと仕入れるのと両方やってるんですね。面白いですね」と関心を持ってくれる方もいらっしゃいました。

まだまだ私は輸入古着について勉強中ですが、地道に精一杯やっていきたいと思います。お客さんに支えられる自分の存在があると感じます。そのうち自分も何かしらお客さんの支えになっていけたらいいなと思います。商売をやることで新しい関係や大事だと想える関係を紡いでいく。これがＪＦＳＡの強みだと思います。そのことはパキスタンでも日本でも変わりません。

輸入古着に感謝！そしてこれからも期待！

千葉センター担当事務局　入江　賢治

コンテナ

上：シェールシャーの倉庫でビンテージの古着を仕分けしている男性スタッフ
左上：JFSA が昨年12月に買い付けた古着の山
左下 :kapre店内の様子。 レザージャケットコーナー。

２０１８年２月、東葛センターに20フィートのコンテナが到着しました。１フィートが約30cmなので全長６ｍほどです。ＪＦＳＡがパキスタンに送っているコンテナが40フィートなので、その半分のサイズです。中身はパキスタンから輸入した、世界各地の古着です。２０１７年12月にパキスタンを訪問した際に選んだものです。

輸入古着は、古着回収量が減少している中で運営費を確保するためにはますます欠かせないものとなっています。現在「第４次古着ブーム」ともいわれ、若い世代を中心にファッションとして流行しています。ＪＦＳＡが活動を始めた90年代中頃は、大ヴィンテージブームともいわれた「第２次古着ブーム」のころです。流行しているファッションに関しては当時と今とでは多少異なるように思いますが、若い人たちが熱心に古着屋に通っている様子はよく似ているように感じます。ＪＦＳＡでも今まで東葛センター内の「kapre(カプレ)」を中心に輸入古着を販売していましたが、千葉センターや各地で開催されているイベントでの販売も始めました。kapreにも若いお客さんが増えてきています。そうしたお客さんにも活動は支えられています。

また、古着の小売店を営む事業者への卸売りも行なっています。来店頻度は様々ですが、北は北海道から南は九州まで数十件の古着屋さんが来てくれています。そうした古着屋さんは、個人経営で小規模な展開をしている場合が多いです。来店してもらった際には、できるだけたくさん話をするよう心がけています。そうすることで、それぞれの思いやお店の様子を知ることができます。個人で行なっていると、なかなかお互いがどのように過ごしているのか知ることができません。悩みを抱えている所も多いです。そういう時に、「こうしているところがあるんじゃないかと思っています。いろいろ聞いてみてわかった、後回しにしがちな帳簿や集計表の作成など、具体的なサポートを行なうこともできたらと考えています。

パキスタンで買い付けをする際も、そこで働く人やかかわる人たちとたくさん話をします。その人たちの暮らしが伝わってきます。古着問屋で下働きをしている人たちは、アル・カイールアカデミーに通っている子どもたちと同じような環境で暮らしていることも多いように思います。ＪＦＳＡは事業を通じて教育活動の自立を支援していますが、その事業でもそれにかかわる人たちと支えあっていきたいと思っています。

東葛センター担当事務局　田辺　航太郎

ピックアップ会場～世田谷公園フリマ～

ＪＦＳＡは月に１回位のペースでフリマに出店しています。フリマ会場の直ぐ近くのスケートボード広場や交通広場、噴水広場はいつも子どもや若者たちなど大勢の人で賑わっています。この世田谷公園フリマは子どもからご年配の方まで本当に多様な世代の方が来場されます。そして大井競馬場フリマなどと違いお声かけすると殆どが「地元の方」ですが、朝早くはバイヤー（転売を目的にフリマで衣類などを仕入れている業者）が「掘り出し物を仕入れる」ために多く来場します。

一方、出店者は２０～４０歳代を中心にやはり地元の方が不用品を販売にみえている印象です。子どものおもちゃ、洋服、生活家電、絵本・・・様々なものが売られています。

ＪＦＳＡには全国から様々な品物が寄せられますので、このような会場では子ども服、レディース、メンズ、バッグ、そして最近ではパキスタンから輸入したアメリカ・ヨーロッパの古着など様々なものが売れます。

地元密着型の世田谷公園フリマですが、ＪＦＳＡを含む地元民ではない「よそ者」も、そして世代も文化も多様な人たちが交じり合って、会場全体がとても心地よい雰囲気です。ＪＦＳＡの売り場でも「あら、久しぶりだねぇ～」から会話がはずみます。また世田谷といえば１５７８年に楽市として開かれたことに始まる「ボロ市」をご存知の方も多いと思います。ＪＦＳＡはボロ市には参加していないのですが、ボロ市通りの近くで年１回秋頃開催されている「せたがや駅前・楽市楽座」には毎年参加しています。そちらもぜひご来場ください♪

海外事業担当事務局　依知川　守

多くの人でにぎわう、せたがや駅前・楽市楽座

ＪＦＳＡ出店の主なフリーマーケット会場

大井競馬場（品川区勝島）　**味の素スタジアム（調布市西町）**
世田谷公園（世田谷区池尻）　**赤羽公園（北区赤羽）**
千葉銀座通り（千葉市中央区）　**池袋西口公園（豊島区西池袋）**

５月の連休は代々木公園のイベントにも出店予定です。
天候やスケジュールの都合で出店できないこともあります。予めご了承ください。
フリマ情報ホームページ：http://www.jfsa.jpn.org/fm.html

フリマ出店情報

「JFSA紡ぎ債」から５年経って…

２０１２年10月19日に、ＪＦＳＡ千葉センター併設の古着ショップをリューアルオープンし、早いもので５年半が経ちました。

それまでは、倉庫の一部をお店にしていたため、夏は暑く、冬は寒いという、お客さんが滞在するにはとても大変な環境だったため、お店のみ他の場所へ移転しようかと考えた時期もありました。ですが、ショップと倉庫が一緒の場にあり、その場で地域の方々に活動を伝えていくことがＪＦＳＡらしさだと考えました。その後、大家さんから新しい建物を建設して店にしたらどうかという提案をいただき、リニューアルすることになりました。

リニューアルの際は、新たに保証金の支払いがあったりと、資金面で充分とはいえない状況にありました。お金を調達する方法は様々ありますが、ＪＦＳＡを支えてくださっている人々によって資金を生み出し、これからの活動を作っていけたら良いと考え、どんな方法があるのだろうと悩んでいました。そんな中、ＪＦＳＡの理事の一人から、疑似私募債という方法があることを聞き、この形なら、目指すところに近いのではないか、ぜひ採用しよう！ということで、「ＪＦＳＡ紡ぎ債」として会員・支援メンバーの皆さんや、ショップを利用するお客さんに協力を呼びかけました。１口１万円、１２０万円の募集予定金額に対して、予定をはるかに上回る、１２７名の方々から２１３万円のご協力があり（無利子・５年後に返済）、とても驚きました。資金面ではもちろんですが、こんなにたくさんの方がＪＦＳＡの活動を応援して下さっていることを実感し、新しいお店とともに、改めてこの場所で頑張っていくための大きな力になりました。

新しくなったお店は、これまで冷暖房がなかった倉庫に比べると、お客さんが長く滞在できるようになったり、ゆっくり見やすくなったという声もあり、大変好評いただいています。新しいお客さんも増え、売り上げも伸ばすことができ、紡ぎ債返済のための積み立てを毎月行うことができました。お金をお借りしてからあっという間の５年間でした。現在、順次返済をおこなっているところです。

パキスタンへの古着送り出しも、５年前は年に３コンテナだったのが、現在は年に４コンテナを継続して送ることができています。また、昨年は男性物の売り場を倉庫内に移動するとともに、パキスタンで仕入れたアメリカやヨーロッパの古着のコーナーを作り販売を始めました。常に新たなことに取り組んでいくことは、これまで来てくださっている方が改めて楽しめるきっかけになったり、新しい方が来てくださることにもつながっています。倉庫の大家さんのご協力もあり、売り場をさらに改装し、引き続きより多くの方々に来ていただける場を作っていきたいと考えています。今後とも、おつきあいいただけたら幸いです。

「返済ができるようになってよかったですね」「ますます活動が広がるよう、陰ながらエールをお送りします」　「遠方のため、直接お店に行くことはできませんが、店舗がだんだん広くなっていくのは喜ばしい限りです。これからも微力ながらお手伝いしたいと思っています」「約束厳守で感動しております。ありがとうございます」　「発足当初を思うと感無量です。いっそうの発展をお祈りします」　「返済のお知らせをいただくまですっかり忘れていました。債権は良いアイディアだと賛同したことを思い出しています」　「立派なＪＦＳＡになり良かったです。これからも応援しています」

＼千葉店ブログ／

おすすめ品コーディネートや
入荷情報など日々更新中♪

2018年3月末現在、お借りした213万円のうち、108万6568円返済済み、77万3000円はご寄付としていただきました。ご協力いただいた皆さま、本当にありがとうございました。

上記、一部のご紹介になりますが、ご協力いただいた方々に返済のお知らせをした際、たくさんのメッセージをいただきました。とても感動し、５年前と同様、再びみなさんから元気をいただきました。この先も新たなことにチャレンジするときは、たくさんの方々がついていると思うと、とても心強く、迷うことなく次の一歩を踏み出せそうな気がしています。

（千葉ショップ担当事務局　大橋紀子）

チャエ ケ サーイ

1・2・3
エーク・ドー・ティーン

●チャエケサートの意味は・・・

パキスタンの公用語、ウルドゥー語で〝チャエ〟は「温かいミルクティー（チャイ）」、〝ケサート〟は「一緒に」で〝チャイと一緒に〟という意味になります。パキスタンではチャイを飲みながら、賑やかにおしゃべりを楽しみます。

パキスタン派遣中、ＪＦＳＡの事務局はムザヒル校長宅に泊まっています。そこで朝ごはんの後、チャイをいただきます。

レストランで飲むチャイには砂糖がすでに入っています。それはそれで美味しいのですが、とても甘いです。ムザヒル校長の家でいただくチャイは砂糖が少ししか入っておらず、別に砂糖を持ってきてくれます。ムザヒル校長が私たちに砂糖の量を尋ね、いれてくれます。。

ある朝、ムザヒル校長が「ナナサン、アープ　キトネー　チーニー・・？（奈々さん、砂糖どのくらい？）」と聞いてきました。「あー・・エークエーク、エークチャイエ」（あー、１杯１杯、１杯ください）と答えました。するとムザヒル校長はにっこり笑って、「エークが３回。ティーン（３）杯ですね」と。「違います！エーク（１）です！」と強く言うと、嬉しそうに砂糖を１杯いれてくれました。

続けて、派遣に同行していたＪＦＳＡアルバイトスタッフの渡辺さんに何杯か尋ねると「エーク、エーク」と答えました。すかさずムザヒル校長は「今、２回言いましたね。ドー（２）杯ですか？」とまた嬉しそうに尋ねました。

次の日の朝からは、ちゃんと１回だけ「エーク」と言おうと渡辺さんと話をしました。しかし、次の日のムザヒル校長が淹れてくれたチャイには、それぞれのカップに１杯の砂糖が入っていました。残念ですが「エーク」をいう機会はその後ありませんでした。

中央にあるのは朝ごはんでは定番のプラタ
油を塗った生地を何層にも重ねて薄くのばして焼いたパン

ＪＦＳＡ千葉センター＆東葛センター バザール開催のお知らせ

●初夏のバザール（柏市）
日時：５月２７日（日）
　　１０時～１５時頃
場所：ＪＦＳＡ東葛センター
　　（柏市大室１７６-１）

パキスタンカレー＆ビリヤニ（スパイシーな混ぜご飯）の販売！他にも楽しい企画計画中。

●チャリティバザール（千葉市）
日時：６月１０日（日）
　　１０時～１５時頃
場所：ＪＦＳＡ千葉センター＆大田切公園
　　（千葉市中央区都町３-１４-１０）

つきたてのお餅、食べ物＆飲み物などの販売！他にも楽しい企画計画中。

JFSAの会員・支援メンバーを募集しています

ＪＦＳＡは正会員及び賛助会員（支援メンバー）で構成されています。
（正会員　個人：129 名、団体：10　賛助会員　個人：1018 名、団体：3　2018 年３月末現在）
正会員によって活動の様々な事柄が決定され、賛助会員の協力によって活動が支えられています。
そして皆さんの参加が、パキスタンの人々との連帯事業を推し進める力になります。

会員・支援メンバーの方には、会報・回収案内（年３回）、サポーターグッズ（年１回）をお送りします。

●年会費（10 月～翌年 9 月）
個人：会員 5,000 円／支援メンバー 2,000 円
団体：会員 50,000 円／支援メンバー 10,000 円

●会費振込み口座（郵便振替）
番号：00160-7-444198
口座名：JFSA
＊活動への寄付にも同じ口座がご利用できます。
通信欄に「寄付」とお書き添え下さい

JFSAでのボランティアのご案内

★イベント★

●初夏のバザール
日時：５月２７日（日）８時～１６時頃
場所：ＪＦＳＡ東葛センター（柏市大室 176-1）
※カレー作りを手伝ってくれる方募集中

●チャリティバザール
日時：６月１０日（日）８時～１６時頃
場所：ＪＦＳＡ千葉センター＆大田切公園
（中央区都町 3-14-10）
※餅のつきて募集中

★第６１回コンテナ送り出し★

日時：７月中旬（水）予定
　　８時半～１５時頃
場所：ＪＦＳＡ千葉センター（中央区都町 3-14-10）
※お昼はみんなでパキスタンカレーを食べます※

★その他のボランティア

●コンテナ送り出し作業（年４回）
●イベント・フリーマーケットなどでの協力（週末）
●切手やハガキの整理
●会報など発送作業（年４回）
●古着の選別体験（グループ対応）
●和服整理ボランティア（毎月第１水曜日 10 時半～）

★ボランティアに関する問合せ先

●ＪＦＳＡ事務局（木曜定休　9 時～ 19 時半）
電話・ＦＡＸ：043-234-1206　メール：jfsa@f3.dion.ne.jp　ホームページ：www.jfsa.jpn.org
＊ボランティアは無償です。　交通費や食費はご自分で負担していただいています。

NPO法人 日本ファイバーリサイクル連帯協議会（JFSA）（9 時～ 19 時半／木曜定休）
千葉センター　千葉市中央区都町 3-14-10　Tel：043-234-1206
東葛センター　柏市大室 176-1　Tel：04-7110-0984

★　会報についての感想やご意見もお気軽にお寄せください。
電話・fax：043-234-1206　メール：jfsa@f3.dion.ne.jp　ホームページ：http://jfsa.jpn.org

JFSA のホームページ QR コード